

E-28 働く婦人の生活に関する実態調査 第一報 乳児を持つ家庭の家事分担
愛知教育大 野田満智子 名古屋大医学 棚橋昌子
愛知県立大 中田照子 愛知教育大 高橋春子

目的 既婚婦人の労働への参加は、高度経済成長以後飛躍的に拡大しながら、その働く条件の整備は遅れている。働く婦人にとって乳児を育てる時期は、さまざまな困難がある。そこで我々は、この時期をとりあげ、家庭内における夫と妻の家事分担の実態に焦点を当て、その諸条件を分析した。

方法 調査時期は1978年12月。調査対象は名古屋市内の無認可保育所に乳児をあずけて働く婦人465名であり、アンケート調査によった。回収率は93.7%であった。

結果 ほとんど妻のみで分担されている家事は、衣生活の「ぬいもの」「手入れ」、食生活の「調理」で、夫の関与率の高い家事は「ゴミ出し」「戸じまり、雨戸の開閉」「夜具のあげおろし」「子どもをふろに入れる」「子どもの遊び相手」と、住生活と保育施設集中している。これらはいずれも、特に技術を要しない過性の家事と、子どもと直接関わる能動的な家事である点に特徴がみられる。共働き家庭とはいっても、全体的には家事の大部分は妻のみ、または妻中心でこなされておおり、妻の労働の過度負担がなお大きな問題であるといえる。夫の関与率に関連の深い条件としては、妻の年齢、妻の職業、妻の収入、妻の学歴など妻側の条件が多くあげられ、その他、妻が働くことに対する夫の理解度などである。